



徳「そう言われては論なしだが、しかし、足下もおれが意見について、ちつとは物まなびをしなせえ せい「浮世物まねか

けん「ナニサ 徳「字問をよ。 せい「ナ

二。論語読の論語しらずよりか、論語読ま

ずの論語知らずの方がよつぽど徳よ

けん「字は知らずとも金さえ持てばいいわ

な 徳「字を知るばかり字問ではねえ。そ

こが料簡違いだ せい「それでもまず字

ばかり知るよ。字問をして本当の身持ちな

人は少ない けん「そうさそうさ。字を

知るよりか三味線を習つて踊りの地を引く方がいい。むず

かしい字を知る程、損がいくかと思うよ。まず観音さまの

「音」の字を見ねえ。やさしく書けば七百という字だが、む

ずかしく書くと六百という字だ 《中略》 ソレよしか。

の。ソレ。七百よ。へト火箸で灰の中へ書いて見する。ソ

リヤ。むずかしく書くと六百。ソレ見たか。ちよつとし

ても百損がいく

(句読点を補い、仮名遣や漢字表記を適宜改めた)

やや学識ありげな「徳」が、威勢のいい「せい」や「けん」に字問を勧めるが、二人は、字は知らなくとも金があればいいだの、字問をしてまともな生活のやつは少ないだの、同じ「じ」なら三味線の地(伴奏)の方がいいだのと

注

【足下】

「おまえ」にあたる少し気

取つた言い方

【浮世物まね】

芸事としての

モノマネ

【踊りの地】

踊りの伴奏

いった反論を展開して取り合わない。しまいには、「観音」の「音」の字を持ち出して、むずかしい字を知るほど損をする話すこの場面、上のように活字に直してしまつと、三馬の意図は十分には伝わってこない。著作権の関係でここに原文の複写を掲載することができないので、次善の策として、冒頭の節用集に掲載の字形で説明してみよう。

『浮世床』の原本では、引用文の太字「七百」のところには図Aが示すような字形の「音」が、「六百」のところには図B(の右側)に示すような字形の「音」が、それぞれ記されている。「音」字の上部「立」の部分草書化されて「七」のように見えるのが図A、行草体風ではあるが、楷書の趣が残されて「六」のように見えるのが図Bである。下部の「日」部分と併せて読むと、それぞれ「七百」と「六百」のように見える。つまり、『浮世床』の「やさしく書けば」は、くずした草書体で書けばということであり、「むずかしく書くと」は、楷書体風に書けばということになるわけである。当時の人々にとつて、筆先を紙から離さずに続け書きする図Aのような字形を書くほうがやさしいと意識されていたらしいことを、まずは押さえる必要がある。

ただし、ここまでの理解では、字問などは不要であるとすると主張と、「音」の字を「むずかしく書く」ことが結びつけられていることを十分に説明しきれない。字形の相違が含意する意味をさらに考えてみる必要がある。

私達は、楷書体をまず覚えて、それを崩したものとして行草体を認識しているので、楷書体は知っていてもその行草体までは知らないということが多い。そのため、図Aのような「観音」はむしろむしろかしい達筆の字と思つて見る。しかし逆に、江戸の庶民の中には、行草体の字は読めるけれども、楷書体で書かれるとちよつと、という人々がたくさんいた。身分の高い人物向けの文書は楷書的な字形で書かれることがあつたが、当時の庶民にとつて身近な証文類は行草体で記されるのが普通であつたからである。実際、必要最小限の文字学習の場合には、楷書体よりも行草体の習得が優先されており、寺子屋のカリキュラムを見ると、初等段階では、楷書体の手本が無いことも少なくない。『浮世床』の「けん」が図Aの「音」を「やさしく」感ずるのは、運筆が楽であるというだけでなく、彼にとつて、行草体こそが、見慣れ書き慣れている書体だったからである。

この文章の冒頭で示した図A・図B二種類の節用集をもう一度見ていただきたい。当時の書物の値段は、現代より以上に使用する紙の分量に比例するので、同じ見出語数でも、行草体と楷書体の二書体を掲出する図Bのような節用集は自然に値段が高くなる。紙面節約（＝安値提供）のために小さい節用集を刊行するとした場合、図Aに見るとおり、省略されるのは楷書体の方であつて、行草体の方ではなかった。楷書体の節用集がないわけではないけれども、

これは、学問を聞きかじった人々が使う辞典である。試しにその中の一本、享保二（一七一七）年の初版以降、幕末まで何度か版を重ねている『和漢音釈書言字考節用集』という如何にも偉そうな名前の節用集を見ると、先ほどの「観音」は収めておらず、かわりに図Cのようにある。

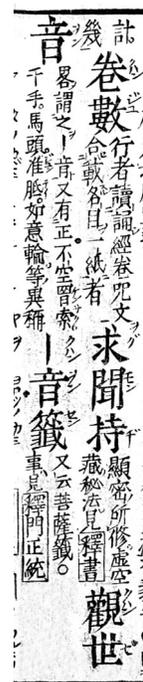


図 C

まず、見出語は「観世音」である。そして「略シテ謂ユラ音ト……」（「一」は「観」字を示す）という割書の注によると、「観音」は「観世音」の省略形で、「不空」や「馬頭」や「如意輪」の種類があるといったことが漢文で書かれている。ここには、漢字表記を示すだけの図A・図Bよりも、はるかに高級な知識が披露されている。

そして、次頁の図Dは、『浮世床』の二人が嫌った『論語』の版本である。もちろん全てが楷書体の漢字で書かれてある。「むずかしく書くと」といって「けん」が書いた「音」はまだ行草体の趣が残る字形であつたが、彼の意識の先には、漢文的な学問世界の象徴である、四角い楷書体の文字があつたはずである。行草体の世界で生きている庶民が、漢文なんていう小難しいものを覚えても逆に損をするばかりだというのが「けん」の主張なのであつた。



江戸前半期に別の版木で刷られた幾種類かの『歌字尽』諸本でもほぼこのままとなっている。それなら、「姓」を当時「めい」と読む習慣があったのかというと、これは確認できない。とすると、この五句目はやはり、次のように解釈する他はないだろう。女偏に「生」まれると書けば「めい」の字になるのだ、と。

この指示を、単純な誤りというわけにはいくまい。なぜなら、「姪」を草書体で書けば、確かに「女篇に生」のような字形になりうるのである。したがって、私が、右で何の断りもなく「姓」と活字化したのは問題の残る処置であったことになる。なぜなら、五句目が、「姪」という漢字はこんな感じの筆の運びである、という指示だったとすれば、『歌字尽』の著者の意識に存在した漢字は「姓」ではなく、「姪」であったと考えるべきだからである。

『歌字尽』はその形式から見て、初学者向けの教科書であろうから、これを学んだ後に、正確な楷書を学ぶ段階まで進んだ人であれば、私たちと同様に、この五句目を、「本当はちよつと違うんだよな、それじゃ、姓の字になつちやうもの」と感ずることができたであろう。実際、江戸時代に記された『歌字尽』の注釈本では、この短歌の五句目が正確であることが指摘されているし、江戸時代後期に刊行された『歌字尽』の中には、図Gのように、五句目を「至めひなり」と修正しているものも存する。しかし、一方で



「むまるゝはめい」型の『歌字尽』版本が多数刊行され続けていたことも事実である。江戸期においては、「姪」を「女篇に生のような字」と記憶して

いた人々は決して少なくはなかった。楷書体の字形を基準にして漢字を見ることが万人の基本となったのは、近代に入ってからのことである。

○ いささか蛇足めくが、以上のような点を踏まえると、次の笑話に見られる、現代の感覚ではとてあり得ないような勘違いも、なんとか理解の範囲内に落ち着くのではあるまいか。

哥右衛門のうたの字は、年寄のしよりの字じや。しよりの字はどう書の。しよりの字は壺歩のちぶの字じや…

『花競二卷断』所収「文字間違いの話」より

こちらは、ひとつながりに書かれた行草体の墨の線のどこからどこまでを一文字と見るかというようなどころからそもそもまちがっているので、やつぱり相当に無理があるのではあるけれども。